第11回　読者と選ぶ

「建築と社会」賞入賞発表

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

作品部門

竹中技術実務研修センター 想

〈2011年3月号〉

所在地―兵庫県川西市柳谷隠場41-1
建築主―株式会社竹中工務店
設計・監理―株式会社竹中工務店
施工―株式会社竹中工務店

竹中技術実務研修センター 想（おもい）は、建物の「品質のつくり込みのプロセスを確実に次世代に伝承する」という基本方針のもと、「見て・触れて・体得する」という体験型研修をコンセプトとした施設です。五感を研ぎ澄ませて学ぶ「ものづくり精神伝承の場」として、作業所の状況に近い半屋外の環境をつくり、内外装の素材や構造をそのまま活かすことで全体に切り詰めたデザインとしました。工事中の建物を再現した実物大躯体や様々な展示物、講義室を内包する大空間では、照明や空調設備に頼らずに快適な研修を行えるよう、敷地南側の高台にある既存樹木群と大きな軒庇による日射負荷低減、自然通風を活かした温度差換気、トップライトからの屋根面採光など、自然の力を活かしたパッシブな環境技術を最大限に活用しています。また、敷地の緑豊かな景観を維持し、既存の研修施設群との連携を図ることで、人と自然をつなぐ研修環境の形成を目指しました。

川合智明　かわい・ともあき
1984年竹中工務店入社、
現在大阪本店設計部長
主な作品
YHP神戸事業所（1992）
三宮ビルディング南館（1999）
清荒神清澄寺　史料館（2008）

大平滋彦　おおひら・しげひこ
1988年竹中工務店入社、
現在大阪本店設計部副部長
主な作品
新日本海フェリー敦賀ターミナル（1996）
聖ヨゼフ学園京都暁星高等学校（2003）
関西大学高槻ミューズキャンパス（2010）

田中光典　たなか・みつのり
1989年竹中工務店入社、
現在大阪本店設計部課長
主な作品
日本近代文学館成田分館（2006）
三井ガーデンホテル汐留イタリア街（2007）
関西大学堺キャンパス（2011）

撮影：古川泰造

作品部門

池田泉州銀行夙川支店

〈2011年４月号〉

所在地―兵庫県西宮市寿町
建築主―株式会社池田泉州銀行
設計・監理―株式会社大林組大阪本店一級建築士事務所
施工者―株式会社大林組

閑静な住宅街『夙川』にふさわしい“まちに溶け込む銀行”、また、池田泉州銀行合併後の第１号店として“新たなイメージを発信する銀行”を目指しました。

店舗面積500㎡以下という地区計画の制約の下、敷地全体を最大限利用した平屋建てとし、極限までコンパクト化した店舗ボリュームと制約外の駐輪場ボリュームを、駐車場を兼ねた中庭で繋げ、それらの上にコの字型の大屋根を載せかけ、全体を一つに纏めました。『１枚の屋根＋パネル壁』というシンプルな形態を、『ガラス・白・緑』の３つの要素で構成し、この地にふさわしい端正さを表現しています。

中庭は、ガラススクリーンを介して内部空間に明るさと広がりをもたらすと同時に、透明感と開放感を強調し、敷地内外の境界を曖昧にし、自然と人々を引き寄せています。また、屋上の四季折々の彩りある風景は、阪急電車や周辺から見る人に安らぎを与え、この街に一層の豊かさを提供しています。中庭を中心とした地表面での景と併せ、新たなイメージの発信を実現することができました。

井上雅祐　いのうえ・まさひろ
1990年　大阪大学大学院工学研究科　修了
1990年　株式会社大林組入社
1999年　東ロンドン大学ディプロマコース修了
現在　　大阪本店建築設計部
主な作品
空港施設関空格納庫（2002）、天聖真美会宣教本部（2005）、太陽生命姫路ビル（2007）、太陽生命京都ビル（2010）

杉本憲祐　すぎもと・けんすけ
1994年　大阪大学大学院工学研究科　修了
1994年　株式会社大林組入社
現在　　大阪本店建築設計部
主な作品
関西学院大学スポーツセンター（2000）、大阪梅田池銀ビル（2007）、天聖真美会世界会館（2010）

伊藤　翔　いとう・しょう
2006年　京都大学大学院工学研究科　修了
2006年　株式会社大林組入社
現在　　大阪本店建築設計部
主な作品
キッザニア甲子園（2008）、池田泉州銀行夙川支店（2010）

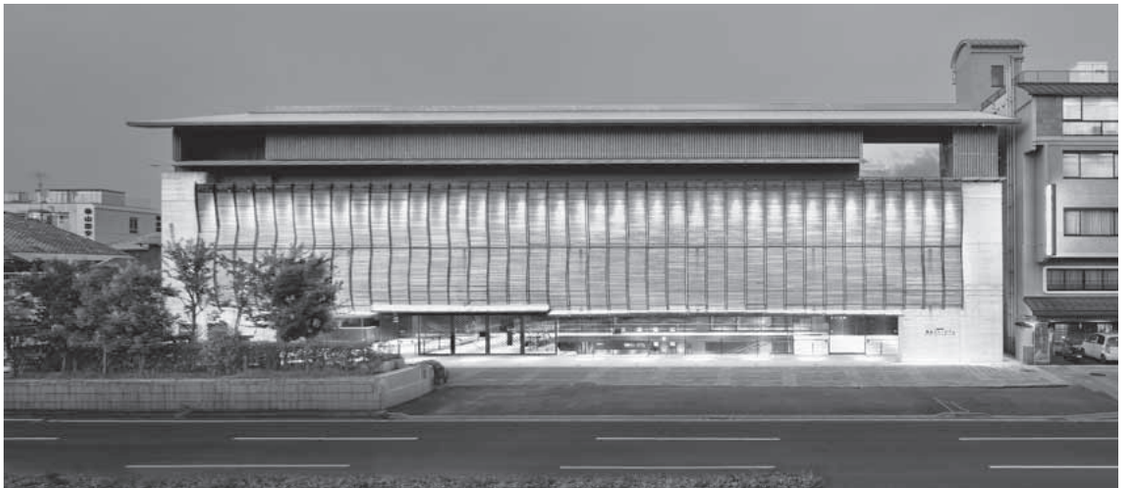
撮影：河合止揚（アトリエリベラ）

作品部門

龍谷ミュージアム

〈2011年６月号〉

所在地―京都市下京区西中筋通正面下る丸屋町117他
建築主―学校法人龍谷大学
設計監理―株式会社日建設計
施工―株式会社淺沼組



※

※

龍谷大学創立370周年事業のひとつとして開設された仏教に関する総合博物館である。

堀川通りと油小路にはさまれた敷地は、東側は大通りをへだてて西本願寺と向かい合い、西側には小路に沿って門前町が広がっている。

展示室を堀川通り側２、３階に配置し中庭の明るさが通りから感じられるように、１階はスパン約35メートルのピロティの奥をガラス張りとした。また、建物の下をくぐって東西ふたつの通りをつなぐ通り抜け路地を設けることで開かれたミュージアムを具体化し、周↗↘辺の門前町に貢献することに配慮した。

西側ファサードの簾状セラミックルーバーは、展示室のコンクリートの量感を視覚的に和らげるだけでなく、西日が直接壁にあたらないように日射遮蔽の役割も果たしている。波打つ躍動的な形は西本願寺が所蔵する国宝「三十六人歌集」の中から水の流れを描いた伝統模様を建物にあわせて翻案し、ミュージアムの活発な活動が波紋のように広がる様をイメージしながらデザインした。

赤木　隆　あかぎ・たかし
1972年　兵庫県立兵庫工業高校建築科卒業
1972年　㈱日建設計に入社
現在　　設計部門デザインパートナー
主な作品
龍谷大学大宮図書館（日本建築学会作品選奨）（2008）、華頂短期大学葵の広場計画（2009）、神戸危機管理センター（2011）、福岡大学中央図書館（2012）

下坂浩和　しもさか・ひろかず
1988年　神戸大学工学部建築学科卒業
1989年　ワシントン大学（シアトル）
1991年　神戸大学大学院工学研究科建築学専攻修了
1991年　㈱日建設計に入社
現在　　設計主管
主な作品
宇治市源氏物語ミュージアム（1998）、大阪府済生会中津病院　北棟（2002）、日本興亜日本橋ビル（2009）

撮影：※東出清彦、他近代建築社

論考部門

ストック活用時代の夜明け〈2011年１月号〉

巽　和夫

公営住宅においてストック活用が始まったのは、1975年頃、２戸１改造や１室増築という方法で行われました。それから７～８年遅れて公団・UR住宅が同様のやり方でスタートしました。住戸の床面積を拡げることが眼目でした。その後、公営と公団・UR住宅は相次いで住戸内部の改修や設備の改善に向かい、2000年代に入る頃からストックの総合的な活用計画に取り組むことになったのです。

2007年にURが「ルネッサンス計画１」を発足させ、ひばりヶ丘団地と向ヶ丘第一団地を対象に、住戸のみならず住棟単位の改修技術を開発することになりました。このプロジェクトは団地再生のスケールの改修となり、画期的な成果を挙げました。「ストック活用時代の夜明け」の論考は、向ヶ丘第一団地プロジェクトへの評価を契機として執筆したものです。

私はこのプロジェクトを高く評価していますが、今後の課題は少なくありません。築後年数の長い団地住宅ストックはおしなべてスケルトンの質水準が低いので、これをどのように扱うか、また改修の経営採算面からの検討も必要です。こうしたバリアを斬新な技術開発やシステム構築によって乗り越えなければなりません。将来、UR住宅における技術的成果がURの３倍にも及ぶ戸数を持つ公営住宅団地に生かされることになれば、ストック時代の「夜明け」は終わりをつげ、いよいよ本格的な活動期を迎えることになるでしょう。

巽　和夫　たつみ・かずお
1929年京都府生まれ。1968年京都大学工学部教授。1993年同名誉教授となり現在に至る。建築社会システム、ハウジングを専攻。㈳都市住宅学会会長、建設省住宅宅地審議会委員などを歴任。現在、全国建築審査会協議会会長。日本建築学会大賞、建設大臣表彰などを受ける。

論考部門

「サードプレイス」考〈2011年４月号〉

舟橋國男

どなたが拙稿に一票を投じられたか、お礼申し上げるとともに、世間の眼は恐ろしいものだと痛感している。ここ数年、「建築社会研究」を僭称している一人として、権威ある「建築と社会」誌に場を頂いた上に、伝統ある協会から授賞下さったことに深謝し、年寄の冷水を顧みず、いま暫くの励みとしたい。

昨年３月４日締め切りであったが、間もなく大地震が起こり津波とメルトダウンにも見舞われるという、大自然は法則通りにプレートを動かすべく既にじわじわと準備しつつあった時に、そんなこととは露知らず正に想定外、能天気な拙文を弄くっていた。

その後の一年数ヵ月、猶生きている者は自らの無力と不明を忸怩たる思いで責め、無能冷酷な政府・官僚を攻撃して憂さを晴らしているが、状況は一向に好転せず混迷を深めつつある。そしてまたどこかで、今、プレートが跳ね断層がズレ私の人生が途中でプツンと終わる、かもしれず…

「ファースト」も「セカンド」も根こそぎ場所を剥奪された多くの人々のこれからはどうなるか、果たして「サードプレース」を論じる意味はあるのか。固より人々は共に生き続けざるを得ぬ以上、「サードプレース」的なるものを求め生み出す動きはあろうけれど、災害便乗の「創造的復興論」に惑わされることなく、先ずは「ファースト」たる住まいと「セカンド」たる仕事の確保こそ絶対の要件である。

飽くなき欲望のまま刹那にしか生き得ない我々の性を如何せんと思いつつ、しかし一方では、「そんなこと言えたオレか」という声も耳底に響いて止まない。

舟橋國男　ふなはし・くにお
1940年生。大阪大学名誉教授。建築計画学、環境行動論を専攻。近年「建築社会研究」を模索。「環境行動論に関する一連の研究」により1997年度日本建築学会賞（論文）受賞。
編著「建築計画読本」2004年、大阪大学出版会。

論考部門

「東日本大震災の被災地を訪ねて」と「日常を失った生活空間」〈2011年５月号〉

北川啓介・米澤　隆
荒木省吾・坂本　睦

昨年４月上旬の当初の原稿の締切日のこと。ひょんなことから、あと10～12頁、一週間ほどで執筆できないでしょうか、と相談をいただきました。30分ほど博士後期課程の米澤隆君と打合せ、当時、メディアで毎日報道されていた通常寝泊まりする前提で計画されていない避難所での住まい方について建築分野としてルポすべく、その翌々日には、名古屋を発って岩手経由で宮城県内の避難所へ入りました。名古屋に待機した荒木省吾君と坂本睦さんには、現地からメモや写真を送りつつ電話で打合せることで、限りある時間の中で手描きの平面パースを描きあげてもらいました。長い歴史を有する建築と社会誌を通して、被災地への、これからの建築計画への精神一到の想いでした。

そのときの経験が大きく、昨夏より、月に数回、宮城県牡鹿半島の復興計画にて名古屋から現地へ赴く際に、時をみては、被災後、数日、数週間、数ヶ月、一年の、刻々と変わりつつある避難所や仮設住宅のお話を伺っています。その度に、大きな社会、小さな社会の中で、刻々と様相を変化させる建築や都市について深く再考せざるをえないことばかりで、昨春のルポがあくまで被災地の時間の経過の一断面であったことを思い知らされます。

ひょんなことからではあるものの、私たちへ貴重な機会を与えてくださった建築と社会誌へ繰り返し感謝申し上げます。（北川啓介）

北川啓介　きたがわ・けいすけ（写真左上）
1974年愛知県生まれ。現在、国立大学法人名古屋工業大学大学院工学研究科准教授、名工大ラジオ局長、ナゴヤラジオ局長。著作：『もうひとつの建築設計資料集成』など。受賞：2008年度日本建築学会東海賞、第23回名古屋市都市景観賞（2010年）、SD Review2011入選など。
米澤　隆　よねざわ・たかし（写真右上）
1982年愛知県生まれ。現在、国立大学法人名古屋工業大学大学院工学研究科博士後期課程／同大学設計副手／HAP+associates主宰。作品：『公文式の建築』など。受賞：SD Review2008入選、京都デザイン賞、AR Awards 2011 Highly commended賞など。
荒木省吾　あらき・しょうご（写真左下）
1987年島根県生まれ。現在、国立大学法人名古屋工業大学大学院工学研究科博士前期課程。
坂本　睦　さかもと・むつみ（写真右下）
1985年埼玉県生まれ。2011年名古屋市立大学大学院博士前期課程修了。現在、株式会社名古屋テレビ事業。

■

選考委員講評

摂南大学教授

田中直人

読者と選ぶ「建築と社会」賞は、本会会誌「建築と社会」の趣旨にふさわしい、社会性・環境などを配慮した有意義な建築作品や論文記事を顕彰するものとして、2001年に制定されたものである。第11回目の顕彰にあたり、「建築と社会」2011年１月号から12月号に掲載された建築作品および論考記事について、読者からの投票結果を基に2012年３月13日、本誌編集委員会で第１次選考を行い、建築作品11点、論考記事13点が選定された。これに対して同年４月19日に最終の選考委員会において、委員長として最終選考を担当させていただいた。候補作品、論考はいずれも魅力ある作品、また、興味深い論考であったが、熟議の末、建築作品３点、論考３点が選ばれた。

まず、作品部門であるが、**「竹中技術実務研修センター　想」**は、建築の社会性について考えさせられるシンプルかつ丁寧なつくりで、統一された空間が洗練された印象を与える。**「池田泉州銀行夙川支店」**は、敷地全体を使って街並みを連続させるなど、街に開かれた空間の提案が評価された。**「龍谷ミュージアム」**は、西本願寺側の正面と裏面とのつなぎの部分の中庭や通り抜け路地空間の連続性が秀逸を極めている。

論考部門の北川啓介チームによる**「東日本大震災の被災地を訪ねて」と「日常を失った生活空間」の５つのルポ**は、テーマが面白く、加えて、雑誌としてアピールする表現力が高く魅力的な内容であった。最近の論考は当たり障りのない、神秘性を感じられないものが多いなか、現場の状況を実にわかりやすく表現する内容であった。挿絵のタッチがとても魅力的で、印象をより深いものとさせた。**「ストック活用時代の夜明け」**は、筆者の考えが見えてこないとの意見もあったが、ストック活用型がいかに重要であるかを認識させるものであった。建築企画として新規の大規模開発を目指すこれまでの流れとは異なるストックの意味や新たな価値創造や再生の手法を求める社会への問いかけともいえる。**「サードプレイス」**は、長年にわたる筆者の建築と社会に関わる識見が巧妙にかつ明快に示されたもので興味深く読ませる記事である。サードプレイスを論じる前に問われるファーストプレイスやセカンドプレイスの在り様についても深く考察する視座から、多様で曖昧な社会における人間環境の本質的な意味について問いかけている。「建築と社会」賞にふさわしい論考であると思う。

以上いずれも優れた作品および論考で「建築と社会」賞にふさわしいものである。今回、選外となった作品および論考のなかにも優れたものが多かった。広く読者の声を反映させた賞の選考を実現するためにも今後普段的に「建築と社会」の編集や執筆において、会員の積極的な参加や参画のもと、多くの意見をいただくことが大切であると思われる。今後とも本賞の趣旨にふさわしい記事が「建築と社会」誌上に躍動し会員諸氏に発信することを期待したい。

■

選考委員講評

武庫川女子大学講師

井上雅人

2011年には東日本大震災があり、建築の世界も大きな影響を受けた。「絆」や「コミュニティ」といった言葉とともに、人と人を繋ぐことが問われた一年であった。『建築と社会』もそのことと無縁ではなかったが、それにしても興味深いのは、今回受賞することとなったうち二つの論考が、震災前に書かれたにもかかわらず、あたかも震災後の社会を見通していたかのようであることだ。**「ストック活用時代の夜明け」**と**「「サードプレイス」考」**は、どちらも震災後に書かれたと言われても疑問に思わないことだろう。

しかし、それはまた当然のことでもある。震災後の諸問題は、そのほとんどが日本社会の積年の構造疲労によって生み出された、以前から存在していた問題だからだ。使い手のない「ストック」建築をどう活用するか、家庭でも職場でもない「サードプレイス」は必要なのか、といった問いかけは、縮小しつつ希薄になっている日本の社会を見事に描写している。大きな事件があると、それ以前の記憶が吹き飛んでしまいがちになるが、冷静になってこういった過去の文章を読むと、問題の継続性がとてもよく見えてくる。**「東日本大震災の被災地を訪ねて」と「日常を失った生活空間」の５つのルポ**のような秀逸なレポートが震災直後に書かれたのも、調査の中心を担った北川氏が、日頃から漫画喫茶のような場所を丹念に観察していたからに他ならないからだろう。日頃から都市のなかには避難所とでも言うべき場所が存在し、そこが持っていた問題がそのまま震災後の避難所にもスライドしていったということが、非常に良く分かる。

こうして論考部門を見ると、近代化の過程を一周して、もはや追いかける相手もおらず、ひたすら自分の内面との戦いに突入してしまった日本社会のほころびを、どうやって繕っていくかという問題が浮上してくる。では、そういった視点は、作る側に生かされているのだろうか。

2011年に関西圏で話題になったのは、「大阪ステーションシティ」や「あべのキューズタウン」といった大阪都心部の複合的な商業施設を中心にした再開発であったが、その一方で、「天理教河原町教会信者詰所」、「御影神愛キリスト教会」、「西宮神社祈禱所」などの宗教施設や、今回受賞した**「竹中技術実務研修センター想」**、**「池田泉州銀行夙川支店」**、**「龍谷ミュージアム」**など、目的が明快な単機能の建築に秀逸なものが多く見られた。これらの建築はモニュメンタルな性格をもちながら、周りから屹立することなく、風景として、街の機能の一部として、調和することを目指す傾向があった。しかしこれらの建築が、「ストック」、「サードプレイス」、「避難所」といった言葉の背後に潜む、持続可能なコミュニティ構築の要請に応えた建築に成り得ているとまでは言いがたい。もちろん、建築は計画から完成まで長い年月をかけるので、今の空気をすぐに反映することはできない。今後、建築家たちがそういった問題と、いかに格闘していくのか注意深く見守りたい。

■

選考委員講評

関西大学教授

江川直樹

建築作品は、一次選考に残った11作品のすべてについて現地に赴き、素材、周辺環境との関係等の確認を行った。**「竹中技術実務研修センター　想」**は、地図を見たときに、山の中のどこからも見えないような場所にあるようで困ったなあと思いつつ行ったのだが、とても気持ちの良い建築だった。四角い箱ではあるのだが、設計者の意図とデザインがとてもうまく合致していると思った。入れ子になっている内部との関係も優れており、内外の連続性、素材、ディテール、どれもが納得できるものであった。**「龍谷ミュージアム」**も同様で、すべてに丁寧さが感じられる。高さの制限もあって地下に沈められた中庭と東西の道を繋ぐ配置構成もこの場所にふさわしく、素材やディテールの選択が心地よく、掲載の写真以外の部分もとても良いと感じた。**「池田泉州銀行夙川支店」**は、掲載の写真が良くないが、駐車場を中庭として取り込んだ配置構成が優れている。一般に、この周辺も含めて殆どのこの規模の銀行が、敷地の半分が建物、残りの半分が駐車場という形式で、まちなみをつくる視点に欠けているものが多い中、沿道性を意識して駐輪場や駐車スペースを取り込んでいる。山手幹線沿いの処理には若干疑問も感じるが、素材も悪くなく、授賞作品と

した。

惜しくも受賞には至らなかったが、「西宮神社祈祷館」は、既存の神社のど真ん中に新たに建物を増築した配置上興味深い作品で、池の西側の茶店からの風景等、成功していると思える。ただ、建物の内部両脇にある細長く気持ちの良い廊下の真ん中が框戸で仕切られているのだけはどうしても納得がいかなかった。さらに、出口のところの橋の素材、ディテールにも違和感を感じた。「大阪富国生命ビル」は、意欲的な取り組みがなされた作品であるが、なんといっても二面が面する阪急東通商店街との関係が良くない。連続する商店街の空間を途切れさせているのがまずい。商店街への構えも良くなく、建物を道路からセットバックさせて配置しただけのようになっているのが大変残念である。「豊橋市保健所・保健センター及びこども発達センター」は、出入り口の重要なアプローチの途中、左手に駐輪場、受水槽室があり、結果的に、アプローチの際に見えてしまうこの部分のデザインが良くなく残念である。中庭を囲む駐車場の車もダイレクトに見えており、ここも残念なところ。その他の作品についても、丁寧に出来ている部分とそうでない特に裏や脇の部分の素材やディテール、扱いに差のあるのが残念だった。

論考部門は他の審査委員講評を参照されたい。

■

選考委員講評

大阪市立大学教授

谷口与史也

作品部門について、エンジニアの末席から印象を述べます。

「竹中技術実務研修センター　想」の第一印象は「どのような人が研修に訪れるか分からないが、洗練された外観と無骨な内観のギャップを楽しんでほしい」というものであった。設計担当の田中光典氏と研修所長の尾崎正明氏に建物とプログラムについて現地で解説を頂く機会を得た。ひとことで言うと建築躯体を中心としたもの造り技術の伝承の場を提供している。床面積1100平米あまりの約半分を使ってRC躯体の施工途中のモックアップが中央に据えられている。約300の不具合事例を盛り込んであり、上級社員でも全問正解が難しい。さて外皮としての建築作品に目を向けると北側斜面の敷地の南側に建物を配置し、南からの直射日光を避けるとともに深い軒庇を設けて、温度差換気によるパッシブ空調としている。建設現場の体験学修という意味でも適度な気象条件を提供している。建物足元は引き戸が設けられており広い外部空間と直結できる。そして外壁の３面を取り囲んでいる山の高さ150ミリの金属折板と合わせて校倉造を連想させるようなデザインとなっている。設計者の弁はイニシャルもランニングもローコストであれという絶対条件から、素材を活かす、自然換気を用いる、躯体は拡張可能でかつシンプルということを考えて設計した結果生まれた和風建築のエッセンスがそう感じさせるものになったと言うことである。本作品の印象は「愚直な技術伝承の場とそれに負けない洗練された建築エンジニアリング・デザイン」に改めることにする。

「龍谷ミュージアム」は西本願寺の正面に堀川通りを挟んで西向きに建てられている。正面外壁のセラミックルーバーはコンクリートの圧迫感と西日による環境負荷を同時に和らげている。堀川通りからエントランスホールを臨むと暗く切り取られた空間の向こう側から中庭の樹木の青さが目に飛び込んできてなんとも心地よい、まさに京都を感じることが出来た。しかも誘われるように踏み込んでも東側の油小路に抜けることができ、周辺との調和を配慮した優れた建築作品である。

「池田泉州銀行夙川支店」は通称山手幹線と大沢西宮道路の交差点に面しており、施工中は自動車販売のショールームかと思っていた。その意味で銀行建築の印象を重厚なものから軽快なものに変えている。車や自転車に乗ってふらっと立ち寄れそうな雰囲気である。実際に歩行者、自動車、鉄道利用者といった全方向からの視線・アプローチを意識した設計になっており、商業建築としても秀逸である。

論考部門については専門外の論文を久しぶりに熟読した。強い印象を受けたのは**「東日本大震災の被災地を訪ねて」と「日常を失った生活空間」の５つのルポ**であり、非常時の公共空間の活用をつぶさに調査しており、現場の状況が挿絵によって一層迫力のある論考である。また、**『「サードプレイス」考』**はパブリックの概念がようやく定着してきた感のある我が国において、サードプレイスは重要なキーワードとして当分私の中でも残ると思われる。**「ストック活用時代の夜明け」**は公的住宅の改修、再生問題を論じ、新たな方向を示している。選には惜しくも漏れたが、「海水煉り・海砂コンクリート―人工岩塩層―」は現在極めて有用な技術であり、RC構造の常識を覆す論考である。さっそく大学院の講義に用いさせていただいた。

■第11回読者と選ぶ「建築と社会」賞 選考経過

○１次選考

2012年３月13日　本会編集委員会において、読者投票の結果を踏まえた１次選考を行った。

１次選考により選出された作品・論考

［作品部門ー11点］

・大阪富国生命ビル（2011年２月号）
・竹中技術実務研修センター 想（2011年３月号）
・豊橋市保健所・保健センター及びこども発達センター（2011年３月号）
・池田泉州銀行夙川支店（2011年４月号）
・龍谷ミュージアム（2011年６月号）
・あべのキューズタウン（2011年７月号）
・第百六十二母屋 天理教河原町大教会信者詰所（2011年７月号）
・医療法人 篤友会 坂本病院（2011年９月号）
・御影神愛キリスト教会（2011年10月号）
・西宮神社 祈祷殿（2011年12月号）
・京都東宝公楽ビル ロイヤルパークホテル ザ 京都（2011年12月号）

［論考部門ー13点］

・ストック活用時代の夜明け（2011年１月号）
・BIMによる設計で見えてきた「改革」（2011年２月号）
・「サードプレイス」考（2011年４月号）
・「『東日本大震災の被災地を訪ねて』と『日常を失った生活空間』」（2011年５月号）
・新大阪ビルディング（2011年６月号）
・建築と土（2011年７月号）
・鉄道が都市を活性化する（2011年８月号）
・駅と街の記憶（2011年８月号）
・新しい大阪駅 OSAKA STATION CITYの誕生（2011年８月号）
・性能による防火設計と木の活用 木材開館（2011年10月号）
・海水煉り・海砂コンクリート ー人工岩塩層ー（2011年11月号）
・構造教育と社会（2011年12月号）
・阪神・淡路大震災の教訓を伝える（2011年12月号）

○２次選考

2012年４月19日　選考委員４名による選考委員会において、２次選考を行い、作品部門入賞３点、論考部門入賞３点を選出した。

■選考委員（敬称略）

田中直人／摂南大学教授（委員長）
井上雅人／武庫川女子大学講師
江川直樹／関西大学教授
谷口与史也／大阪市立大学教授